

<シンポジウム 9> 前頭側頭型認知症 (FTD) をめぐる基礎と臨床の最前線

座長の言葉

座長 鳥取大学医学部附属脳幹性疾患研究施設脳神経内科部門 中島 健二  
群馬大学大学院医学研究科脳神経内科学 岡本 幸市

(臨床神経, 48 : 989, 2008)

認知症, なかでも前頭側頭型認知症 (frontotemporal dementia : FTD), 前頭側頭葉変性症 (frontotemporal lobar degeneration : FTLD) は, 基礎研究や病理学的・臨床的概念の議論をふくめて大きく発展している. 臨床的にも決してまれな疾患ではない.

本シンポジウムでは, 基礎的研究に関し, 最近のトピックである progranulin, TAR DNA-binding protein of 43kDa (TDP-43) を中心にお話しいただき, 理解を深めた.

神経病理学的にも多くの議論がなされてきており, 神経病理学的な観点から概念の変遷や分類に関する議論が続いている. 本シンポジウムでは, それらをふまえた FTD・FTLD における病理学的な問題点をふくめた最近の話題について講演していただいた.

FTD・FTLD は, 臨床的にも概念が大きく変遷してきてい

る. 特有な人格変化や行動変化, 言語障害をきたすピック病について種々の議論がなされてきた. 1994年に FTD の診断基準が提唱され, 非アルツハイマー型の脳の前方部に原発性の変性を示す変性性認知症性疾患を包括的に捉えるようになった. さらに, FTD, 意味性認知症 (semantic dementia : SD), 進行性非流暢性失語 (progressive non-fluent aphasia : PA) をふくむ前頭葉側頭葉に変性を示す包括的な概念として FTLD が提唱された. その後も臨床病理学的な概念や分類に関する議論が続いている. 本シンポジウムでは, 初期臨床像や症候学などの臨床的話題についてもわかりやすく解説していただいた.

本シンポジウムを通して, 最近の研究成果, 概念・分類の変遷や臨床的な問題点についての理解が深まるものと思う.